

津田左右吉幼少期の教養形成の環境について

～「子どもの時のおもひで」の記述を中心に～

可 児 光 生

1. はじめに

津田左右吉の没後 50 年にあたり、早稲田大学と美濃加茂市民ミュージアムは「津田左右吉展」を 2011 年 10 月から 2012 年 3 月にかけて開催した。今なお大きな位置を占める津田の研究成果を検証し、また津田の人的な交流、新たな人間像を伝える展覧会となった。

津田は、晩年「子どもの時のおもひで」（昭和 24 年（1949）9 月刊行〔津田 76 歳〕の『おもひだすまま』の附録に書き下ろしで収録）¹と「子どもの時のおもひで以後」²を回想録として残している。いずれも体験時から多くの年数を経ており、執筆当時の思いや解釈が少なからず入っているにせよ、少年時代の生活の鮮烈な記憶と心境が生々しく書かれた貴重な文献であることは間違いない。

津田の生い立ちや幼少期の様相については、この展覧会でも一部紹介したところであるが、本稿では、津田がのこしたこの 2 つの回想録を中心に、郷里を離れるまでの間（明治 19 年〔1886〕文明小学校卒業）の家庭や学校などの教育環境、学習体験などをとりあげ、のちの研究や思想構築の基盤となる教養がどのように形成されていったかを考えてみたい³。

2. 幼少期の教育環境について

（1）文明小学校と文明開化について

明治 5 年（1872）の学制発布により、加茂郡福島村（現在・加茂郡川辺町）に「文明義校」が設立され、のち則光村（現在・美濃加茂市下米田町）に移り、「文明小学校」⁴と改称した。現在の下米田小学校の前身である。

「先生は三人であった。本当の訓導は一人だけで、モリ先生といふのであった。…その外に助教といはれてみた先生が二人、その一人は、これもナゴヤの旧藩士で、…もう一人は父であった。」（「子どもの時のおもひで」（p.14）、以下「子どもの時のおもひで」からの引用は『全集』第 24 巻のページ数のみ示す。）

津田は文明小学校で、森達、野田有尚、父の津田藤馬の三人に教わった⁵。

「学校で祝祭日の儀式といふやうなものは行はれなかった。新年にも無かったやうである。国旗が揚げられたかどうか、思ひだされぬ。…後年のやうに国家的意義のある祝日をやかましくいふことは、学校でもせられなかった。」（p.14）

というのが津田の学校の雰囲気についての印象である。

明治 23 年（1890）の教育勅語の発布以降は忠君愛国道徳精神が徹底されるようになるが、明治 10 年代、津田が通っていた学校は明治初年の文明開化の雰囲気と自由で開放的な空気が漂っていたと思われる。家永三郎はこれに関して「明治 20 年以後の国粋主義復活以後の学校教育では到底考えられないところが多かったようである。」「この前後の学校教育が、その後の教育思潮に比べていかに異質な内容をもっていたか」などと述べている⁶。

一方、文明開化は津田の家庭でもあった。

「床の間に定紋のついた具足びつがおいてあったが、…この具足びつには具足が入れてなかった。その代り毛おりもので作ったいろいろの衣類が入ってみた。」「わたしが燕尾服が具足びつにいれてあるのをかしいといったら、おばあさんが、燕尾服は今の具足だからこれでよいだらう、といったことをおぼえてみる。」（p.18, p.19）

この話はまさに「津田家の文明開化」を象徴するものであろう⁷。

津田は、次のようにも言っている。

「明治の初年の「文明開化」の風がこんなありさまでこんな「やまが」に吹きこんで来たのである。」（p.19）

当時、小学校で用いられていた教科書の類について津田は、

「学校での教科はやはり本を読むことが主であつたらう。…「小学修身書」といふものがあつたやうな気がするが、それもたしかでない。…たゞはつきり思ひ出すことのできるの、『岐阜縣地誌』といふものと『太古史略』といふものとの二つがあつ

たことである。…薄い本で黄いろな表紙のつけてあったこの二冊だけは、ありありとその姿が目につかぶ。…日本の歴史については、或はサンヨウ（山陽）の『日本外史』をこのころに読みはじめて…」(p.40, p.41)

と述べている。大正14年(1925)6月調べの「文明義校書籍目録」⁸をみると、122冊の蔵書のなかから『日本外史』『太古史略』『岐阜県地誌』などが確認できる。時代がかなり下っており、これが実際に津田の時代に使われていたものとは言えないが、明治から大正にかけての小学校でこれらの教科書が常備され教育がおこなわれていたことを物語るものである。

(2) 恩師・森達について

小学校時代の恩師・森達(もりとおる・号好齋)⁹は、山崎派の細野要齋の門人の儒学者で、文明小学校の訓導(校長)として津田の指導にあたった。津田の自叙伝や日記のなかに森のことが頻りに記述されている。心からの恩師として尊敬し、津田は晩年、次のように述懐している¹⁰。

「昔の学問の仕方というものは、先ず何しろ本を読むことだけ。…色々な本の講義も聞きましたけれども、…大抵忘れてしまうんです。…ところが不思議なことにですね。大きくなって何十年もたった後にです。ふあとそれが思い出されることがある。そういう文字がでできますねとね。これが昔あそこで、米田の学校で、森先生に教えられた言葉だなーと思い出すがしばしばある。」

津田は森から学校においてもまた授業以外でも漢文の素読を受け、朱子の講釈を聞いている。森は儒学者として指導にあたったが、それだけでなく、津田の一般的な教養習得の面で大きな影響を与えた。

「モリ先生からうけた感化は大きかったと思ふが、それは儒教の教によってでもなく、ヤマザキ学派の流儀によってでもなかった。」(p.44)

「(山小屋の床の間の軸の落款に養齋とある。)養齋というのは、幕末から明治の初年にかけて、ナゴヤの藩学の明倫堂の督学であった細野忠陳のことであり、三宅尚齋の学統に属するヤマザキ派の学者である。…ばくは、これを、子どもの時の小学校の校長であり八年の間その教をうけた森好齋先生から頂いて持ってゐるのである。」(「山小屋の床の間」初出誌『新潮』昭

和32年9月、『全集』第21巻、p.575。)

大正2年(1913)、津田は森に対し『神代史の新しい研究』(大正2年10月5日発刊)を贈呈したようである。森は津田に対し次のようなお礼の葉書¹¹を出している。「斬新なる御卓見」と評価し次に発表予定の朝鮮史への期待を伝えている(同年、『朝鮮歴史地理』第1巻・第2巻を発刊)。

「東京麹町区紀尾井町九 津田左右吉様 愛知西春日井郡杉村¹² 三六六 森達」(大正2.10.23 消印)

「御口遠ニ打過厚く御詫仕候。老躰未夕餘命を保ち居候間、御省慮被下度候。扱今般御珎書御贈与ニ預り直ニ拝讀昼夜兼行候處、斬新なる御卓見ニハ先つ感服仕候。尚熟讀玩味せハ益佳境ニ入るへしと楽しミ居候。次て朝鮮史も御著述之趣、是又御出板(ママ)之上ハ何卒拝讀仕度、今より鶴首致し居候。先ハ御礼迄、早々。尚々、貰ひ合せの物小包にて差出し候。御笑納被下候ハ幸甚ニ候。」

(3) 父・藤馬について

津田の父・藤馬(1843～1899)は、竹腰家(尾張藩付家老)を藩主とする今尾藩¹³の藩士であった。明治維新までの約10年間、江戸の藩邸で勤務し、維新後は領地であった加茂郡柄井村に移り住んだ。津田も述懐しているように、今尾から柄井村及び周辺に帰農した士族は20軒ほどあったようであるが、のちに津田家を残してすべてが柄井村から離れてしまっていた。村の中で孤独な士族であった。時代はやや下るが、明治31年(1898)、左右吉の妹・はるが小学校を卒業したときの名簿¹⁴によると、父兄の族籍職業欄には、明治20年(1887)からの12年間で、「士族」と記されているのは津田藤馬のみであり、他はすべて「平民」と記されていることで、それは裏付けられる。

藤馬だけが「やまが」に残った理由は不明であるが、社会的地位が確保された文明小学校の教員(助教)という職業についていた¹⁵ことも原因の一つと考えられる。

「父が、ヨナダの村々から頼まれたか勧められたかして、その教師になることになり、そのために、そのころ臨時に設けら

れてみた教員養成所のやうなものに入学した。場所は二、三里あまり隔たつてゐるハチヤ(蜂屋)といふところであつた、と聞いたやうなきがするが、これもたしかでない。(この養成所が何といふ名であつたかも、たしかには知らぬが、或は師範学校といはれてゐたかと思ふ。)(p.12)

岐阜県では、明治初めの小学校設立にともない、資格を有する教師の養成を図るため明治6年(1873)、師範研修学校を設立(同8年に岐阜師範学校と改称)、同8年2月に加茂郡上蜂屋村に出張所を開設した¹⁶。最初の入学者名簿(16名)に次のように藤馬の名が見え¹⁷、津田の記憶が裏付けられる。

「福島村 文明学校 東栃井 津田藤馬 三二・四(筆者注:歳)」

明治維新により、士族にとってそれまで与えられていた社会的、経済的特権が政策的に剥奪されていった。そういう状況で、一定の教養学識を必要とし、公的権力によって権威付けられた「官吏」「警官」「軍人」「教員」といった職業は帰農士族の「転身先」の一つであつた¹⁸。藤馬もその一例であるといえよう。

父・藤馬と村のことについて、津田は次のように述べている。

「文字の知識がいくらかはあり、さうして、どうにかかうにか「士族」の体面をもちこたへてゆくことのできた父は、むかしのならばのまだ無くなってゐなかつた明治時代の始め、また都会の地から遠くはなれてゐて気風があまりすさんでゐなかつたこの土地のこととて、まはりの人から或る程度の尊敬をうけてゐた、といふことである。父のほうでも、できるだけ土地に同化しまはりの人となじむやうにしてゐたらしい。」(p.6)

それを裏付けるように、藤馬は明治20年代、地域にある溜池管理の「地主総代」を勤めたり、水量立会いの役をする¹⁹など、帰農後、士族という異質の存在でありながらも、「武士」としての気概と責任感を持ち、当時の村落社会の一員としての役割を果たしていた。²⁰

(4) 家庭について

津田は家庭について次のように語っている。

「(家では)むかしの武士ふうの特殊のしつけは何もうけなかつた。」(p.16)「もつとも、家のもと武士の家であつたとい

ふことは、何かにつけて子どものわたしにはわからぬことはなかつた。父は毎年一度、秋風のたちそめるころになると、刀の手入れをした。」(p.17)「むかしの武士ふうの年中行事は、家ではほとんど行はなかつた。」(p.19)

「わたしの生れたのは下級武士の家であつたが、生れた時はもう武士のよのなかではなくなつてゐた明治の六年であり、農村に移住し農家の間に立ちまじつてもゐたので、武士の生活らしい空気は家の内にも殆ど無かつたであらう。子どもの時でも、武士風のしつけなどはうけなかつたやうに思ふ。」(「刀剣」1965年、『全集』第21巻、p.581)

左右吉自身に武士の家であることの自覚があつたものの、父・藤馬には士族としての格別の振る舞いがなく、子どもに対しても武士風のしつけを一切行わなかつた。武士風のしきたりや伝統がなく、年中行事もない家庭であつた²¹。

因習にとらわれない家庭、文明開化で新しい空気、自由な学校、これらの要素は、物事を合理的に見、客観視して研究の対象とする津田ののちの研究態度や姿勢に一定の影響を与えたと考えられる。

また、

「わたしの家には、文芸の空気など少しも無かつた。」「わたしの家には、これといふほどの書画のたぐひも無かつた。」(p.47)

「われは幼時より、厳格なるといはむよりは寧ろ乾燥なる家庭に育ちたれば、又た特に質朴なれども鄙野なる田家の間に介在せる家庭に育ちたれば、われとうちいでて同じ年輩なる児童と遊び交らひしこと少なき代りに、あどけなくたはむれかはし幼時の記憶なく、又た楽しくなつかしき家庭の記念を有せず、…」(「日記」明治30年5月5日条、『全集』第25巻、p.219)

という記述からもわかるように、津田家に文化的環境があつたとは言えず、いわば無味乾燥した家庭生活だつたようである。

また、津田は、

「小さい時から家のうちにばかりゐたので、学校へゆくやうになつても、帰ると外へは殆ど出なかつた」「みんなはヒダ川で泳ぎをしたが、わたしはそのなかまにも入らなかつた」(p.21)

と、周りの子どもたちと交じり合わず、孤独な少年だつたようである。

3. 読書体験、接した書物

家永は、津田の明治29年(1896)から明治末までの日記から、青年期、多方面にわたつた津

田の関心を裏付ける読書歴を詳細に紹介²²しているが、少年期については特に触れていない²³。

津田の読書体験、接した書物について、二つの回想録から32点（青年期を含めると62点）の書物が確認できる。その内容は

A. 儒教関連などの漢籍類

『五経』『十八史略』『左傳』『蒙求』『文章軌範』『小學』『家禮』など

B. 歴史書や教科書類

『太古史略』『日本外史』

C. 江戸時代の物語類

『膝栗毛』『絵本小栗一代記』『水戸黄門仁徳録』など

D. 紀行文その他

『岐阜縣地誌』『紀行文（岐阜日日新聞）』

の4つに大きく分けることができ、このことについては既に報告している²⁴であるが、改めて一部を紹介しておきたい。

○『日本外史』について

「日本の歴史については、或はサンヨウ（山陽）の『日本外史』をこのころに読みはじめて、それによっていくらかの知識を得たのではないかと思ふが、それは或はもう一年ほどあとになってからのことかも知れぬ。」(p.41)²⁵

「おもしろかったのは『日本外史』であって、これは、どれだけの時間がかかったか忘れたが、全部読みとほしたらしい。」
「『日本外史』に出て来る人たちの伝記逸話や、その記事に関係のある詩や歌などをいろいろ教へて下され、時には人物の批評などもせられたので、この本を読むことのおもしろみがあるために特に深かった…」(「明治十年代の田舎の小学校」、『全集』第24巻、1965年、p.80, p.81)

『日本外史』は文政年間、儒者である頼山陽が平安時代から江戸時代開闢までの武士の興亡を中心に綴ったものである。漢文体形式でありながら、ドラマティックな展開と叙述が簡明であるため、特に幕末には愛読された書物である。明治に入っても人気は衰えず広く普及し、漢文の入門の教科書としても用いられた。津田の『日本外史』への関心は他の書物に比較して格段に高く、前に紹介した他にもたびたび記述が見られる。

「わたくしの先生からうけた感化は、さういふ講釈からでは

なくして、別の方面にある。小学校の教科書として日本外史が用ゐられてゐたが、先生はその授業の時に、読んでゐたところに関係のあるいろいろの歌や詩を教へて下された。あとから考えると平家物語や太平記などから取って来られたのであらうが、それがひどく嬉しかった。」(「諸生規矩階級、読書路徑」初出誌『図書』昭和16年10月、『全集』21巻、p.391～392)

『日本外史』が津田に与えた影響について、早川は「歴史は本職」と津田が気持ちを持つようになった一つの要因であったとして指摘している²⁶。又、李は「戦後、津田はイデオロギー偏重の歴史教育に対し、歴史的出来事や人物にまつわるいろいろなエピソードを伝え、歴史そのものに興味を抱かせる必要性を説いたが、これは自身の体験に基づくところが大きいであろう」とする²⁷。『日本外史』を含めた歴史書物の「天地間の一大劇場の活劇」は彼に大きな影響を与えた。

のちではあるが

「旧幕府」といふ雑誌を読むに、坐ろにむかしの忍ばるる心地す、「戊辰の夢」及び「南柯紀行」殊に感あり、幕末史、あこれ真に人間悲哀の事、痛恨の事、而して又た爽快の事、而して又た是れおのづから天の道、人の命、国史中最も趣味ある時期、…」(「日記」明治30年5月4日条、『全集』25巻、p.216)

と記しており、津田は人間悲哀のある時代や歴史に高い関心を寄せていることがわかる。²⁸

○物語について

物語への関心については次のような記述がある。

「もっとも家に雑書がいくらかあったので、それを見つけると、読めるものは何でも読んだ。イツク（一九）の「膝栗毛」の端本を、どこからかひきずり出して来て、ひろひ読みをしたことを思ひ出すが、これは読むよりも絵を見る方がおもしろかったであらう。わらじを片足だけ買はうとして笑はれてゐるところのあったことをおぼえてゐる。ユグリハンガン・テルテヒメ（小栗判官・照手姫）の話とか、「水戸黄門仁徳録」とかいふやうなものも何度も通読した。」「もっとかういふものがあつたら、わたしもっと多く何かを読んだであらうに、それができなかった。勿論さういふものがあつても大人の詠む本である。そのころに、子どもの読む本ができてゐなかつたことは、いふまでもない。」(p.44, p.45)。

まさに鮮烈な記憶である²⁹。儒学のかたくりしい書物にくらべて異質のいわゆる娯楽的読み物であるが、津田はこれらをむさぼるように読んだことがうかがえる。奔放な構想力でつくりあげられる奇想天外なドラマの世界に津田はのめりこんでいた。

4. 仏教と儒教に関して

津田家の精神生活に関して、仏教に関しての記事が興味深い。

「父は仏教に対しては冷淡であつたらしい。」「毎朝きまって仏壇の前で礼拝をしたが、それについて父は、おれは御先祖さまにおまゐりをするのだ、ほとけさまを拝むのではない、おれはお念仏などは唱へないよ、と母にしばしばいつてみたそうである。(家の宗旨は浄土宗であつた。)」(p.29)

「ナゴヤは、概していふと、仏教の信仰の厚いところらしく見えるのに、そこで育つた父が、どうしてかういふ考をもつやうになつたかは知らぬが…」(p.30)

「わたしは、(おばあさんが亡くなって)毎朝、学校のゆきがけに、まはりみちをしてそのお墓におまゐりをした。」(p.67)

このように父・藤馬は、法事等の儀式は別として、仏教に対して無関心で、基本的に仏教信仰とは無縁の家庭であつた。

しかしながら、中学校以降の津田の動向をみると、「偶然のことながら」³⁰、明治22年、名古屋で南条文雄が校長をしていた東本願寺別院の私立中学校(大谷派普通学校・現在の名古屋大谷高等学校)に入学する³¹。のち、明治26年(1893)夏、沢柳政太郎が京都東本願寺の招聘に応じて京都の教校に赴いたのに同行したり、富山県にある東本願寺別院付属の高岡教校の教授に就く³²など、個人的には仏教の世界に深い関係を結んでいた。

その一方で後年津田は、客観的視点から研究を進めていたと思われる。「仏教革新の第一着手と古代印度の研究」で仏教の近代化には古代インドの歴史研究が必要であるといひ³³、「仏教史家に一言す」では、「今の仏教史家と称するものが、故意の偏私をその間に挟まんとする傾向あるは、ここに断言を憚らざる所なりとす。」³⁴などと、その研究姿勢に対し批判を加えているなど、仏教に大きな関心を示している。

前述したように森達から、また父からも儒教の漢籍類の指導を受けた。しかしその体験の津田の感想は、

「儒教の本も読み講釈も少しは聞いたが、本に書いてある文字の意義を知ることがいくらかできたのみで、儒教の教といふものは何もわからなかつたらしい。ヤマザキ学派の習ひであるから、日常の行ひについての工夫のしかたといふやうなことも話されたに違ひなく、その時にはそのことの意味だけはわかつたかと思ふが、工夫そのことは、しもせず、できもしなかつたらう。」(p.44)

であつた。

「中学時代に友人たちと同人雑誌を作つたことがあるが、その時に「漢学の必要を論ず」といふことを書いたおぼえがある。これがわたくしの文章が活字になつたそもそものはじめであるが、しかし実をいふと、小学校を卒業してからは、却つて漢文の書物はあまり読まないやうになつてみた。」

「漢字をいくらか知り、漢文を少しでも読んでみたことが、後に日本の古典をよむやうになつた時、大きな助けにはなつた。」(「明治十年代の田舎の小学校」前掲、p.81, p.82)

明治初年、土族の家庭に生まれた子どもとして、左右吉に対して基本的な儒学の知識と素養を得るための指導が行われた。

近世の村役人や豪農層の学問に関する研究は最近深められており、例えば尾張藩の海西郡の庄屋をつとめた服部家の記録から当時の子どもの儒学学習の様子を知ることができる³⁵。8歳から13歳までの間(文政年間)に子どもは「論語」「大学」「孝経」「孟子古義」など漢籍を繰り返し読んでいた。当時の社会の身分にふさわしい水準を保持するため、ひととおりの文化教養は必要なものであつた。

津田と儒教との関係を示す資料として、森達の指導によると見られる文明小学校卒業の頃の6冊の筆写本(早稲田大学図書館所蔵)があり³⁶、これに関し、早川、土田両氏が言及している³⁷。筆写本の内容は次の通りである。

◇「諸生規矩階級」

[巻末に「明治十九年八月上旬 津田左右吉寫」と記載](布施維安・著)朱子学、山崎闇齋の事項説明が掲載。森好齋は闇齋学派の蟹養齋(布施維安)の系譜につらなる。

◇「読書路徑」

[巻末に「明治丙戌八月 津田左右吉寫之」と記載] (布施維安・著) 朱子学関連図書の目録解説的な内容。

◇「孝経句解」

[巻末に「明治十九年六月 写之 津田左右吉 / 明治十有九歳丙戌夏六月晦日 津田氏」と記載] (布施維安・著) 朱子学の写本を筆写。

◇「正學正傳」

[巻末に「明治丙戌七月上旬 津田氏」と記載] (上月信勝・著) 朱子学の研究者、業績、著作をまとめたもの。山崎闇齋の事項説明が掲載。

◇「道統図説」

[巻末に「明治十有九年七月朔日 津田左右吉 / 明治□□九年七月朔日 津田氏 □書」と記載] 孔子以来の儒学者系図、生没年。山崎闇齋の事項説明が掲載。

◇「語録解義」

[巻末に「明治十九歳次丙戌 津田左右吉寫」と記載] 朱子語録(原典でなく、読解テキスト)のうち、単語を辞書的に掲載したもの。

筆写したこれらの書物に関し、津田はのちに次のように特別に一項を設けコメントを残している。

「諸生規矩階級一冊、読書路徑一冊。これはわたくしが子どもの時に写しておいた本である。明治十九年に写したと書きそへてあるから、考へてみると、小学校を卒業した十四の時のことらしい。かういふものを写したとすら、殆ど忘れてみたが、六七年まへに、むかし読んだ四書や五經の素読本のつみかさねである中から、ふと見つけたので、何とはなしに手ぢかなところへもって来ておいた。」「養齋の著述では、なほ、「孝経句解」といふものを、上記の二書と同じやうにして、わたくしは写してあるが、これは漢文で書いてある。…」「わたくしは小学校時代に、森先生から小学と家禮の講釈をきいた。近思録をきくまでにはならなかつたと思ふから「諸生階級」の新学の段階で止まってしまったのである。さうして聴いた講釈もみんな忘れてしまひ、おぼえてゐるのは小学の「應對」をヨウタイと読むことくらゐである。」(「諸生規矩階級、読書路徑」前掲、p.387～p.391)

このように、津田は、筆写した書物の内容やのちの研究への直接的影響については言及していないものの、この筆写は津田にとっては漢文に関する

基本的素養を得、朱子学全体のイメージをつかむ貴重な体験であつたと思われる。

津田はのち儒教に対し研究を深めていくが、幼少体験に触れつつ、

「孝経を読むに其の含蓄せる概念は頗る明白ならず、且つ一貫せざるが如きを覚ゆ、…」「われ孝経といふもの通読せしははじめてなり、山崎派にて好んで用ゐざりしにやあらん、幼時は素読も習はざりき」(「日記」明治33年8月11日条、『全集』第26巻、p.93～p.95)

と記し、さらに

「儒教が人情の自然にとほきところあるは否むべからず」「儒教の所謂「学道」は畢竟無意味にして、その道もまた遂に根柢なきもの…」(「日記」明治36年7月9日条、『全集』第26巻、p.352～p.353)

と、儒教の形式主義に対して批判的態度を表している³⁸。

5. 課題

「はじめに」でも記したように、「子どもの時のおもひで」は実際の体験からかなりの年月が経過して執筆された「回想文」である。従つてその記述は当時を振り返りつつも、その後のさまざまな経験や研究生活を経た上のものである。晩年の自己を意識した表現になっている部分があることは否めない。

津田は、青年時代を中心に書いた日記、日信、著述にも幼少期の出来事について触れている部分があり、今回、断片的にその一部を紹介した。日記は、個々の事象において「子どもの時のおもひで」と比べるとより実体験に近い時代でのものであり、率直な思いが吐露されている。今後はそこでの記述や表現を精査し、「子どもの時のおもひで」の回想内容との相違や矛盾点の比較検証を行うことによって、津田の思想形成の過程を捉えていくことが必要であろう。

【注】

- 1 のち、『津田左右吉全集』(以後、『全集』と略す。)第24巻『自叙伝他』岩波書店、1965年に収録。
- 2 これは題名のなかつた「遺稿」であり、1965年、『全集』24巻に収録される際に便宜上付けられた表題であ

- る。
- 3 津田の実像や研究姿勢を究明した試みとして、家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』（岩波書店、1972年）があり、「幼少期の原体験」として記述「尾張藩の佐幕派の家中で成長した事実は、歴史意識形成の出発点をなす原体験」「幼少期以来の孤高の生き方が津田の学問の強さ弱さの原点」がある。
また、瀬上瑛は、津田について「彼の思想の底流に父祖からおのずと受け継いだ美濃の国学の精神があったと解釈しても、あながち的はずれとはいえない。」としている（瀬上「津田左右吉」『東洋学の系譜』大修館書店、1992年、p.166）。
なお、木村時夫は「歴史の見方とその叙述について—津田博士の子どもの時のおもひで—」を中心に一（早稲田大学社会科学部学会『早稲田大学人文自然科学研究 11』1974年、p.29～p.48）を著している。
 - 4 瀬上は、「父が勤務し、彼が就学した地元の小学校が文明開化の教育を指向していたことは校名が如実に示している」としている（瀬上、前掲、p.166）。
 - 5 尾関公見「津田先生のご両親」『全集第24巻』付録、1965年。横山良彦「文明義校と教師」『津田左右吉と美濃加茂』津田左右吉博士顕彰会、2011年。
 - 6 家永、前掲、1972年。
 - 7 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」『没後50年津田左右吉展』展示図録（以後『図録』と略す。）早稲田大学、美濃加茂市民ミュージアム、2011年、p.34。
 - 8 可児恵子「下米田小学校教育史料」『岐阜県史料調査報告書』第18集、岐阜県歴史資料館、1997年。
 - 9 明治5年秋、細野忠陳から「達」の名の由来について触れている記事がある（『名古屋叢書第22巻・感興漫筆・下の二』p.300）。
 - 10 「尾関公見・津田左右吉の対談記録（昭和32年10月19日）」『胸像建立記念誌・津田左右吉博士』津田左右吉顕彰会、1992年、p.71。
 - 11 前掲『図録』、p.29。
 - 12 現在の名古屋市東区と推定される。津田の母・勢以と同郷。
 - 13 今尾藩は尾張藩の「御付家老」で家康から二万石、尾張藩から一万石を知行され、他の家老職とは一段高い地位にあった。明治維新とともに尾張藩より独立したが、廃藩置県により今尾県と改称、間もなく岐阜県に統合された（『美濃加茂市史・通史編』1980年など）。
 - 14 則光尋常小学校「卒業姓名簿」（前掲「下米田小学校教育史料」）。
 - 15 下米田尋常高等小学校「明治六年起・沿革誌」（前掲「下米田小学校教育史料」）に「訓導 森達」「助教 津田 藤馬」の名が見え、母・せいも明治16年から19年まで「雇」として勤務していたことがわかる。『図録』p.3 写真参照。
 - 16 なお、蜂屋には津田家の親戚があり、よく遊びに行ったようである。献上蜂屋柿の柿庄屋・日江井家である。「それはハチヤのうちのカセダ（加瀬田）といふところにある家であった。前に書いたナゴヤのツダのむすめでわたしの従姉にあたるものが、そこに嫁いでみて、わたしと同じとしの子どもがあった。…柿庄屋といふものがおいてあった、その庄屋をつとめてみた家ださうである。」（p.27）。
 - 17 『美濃加茂市史・通史編』1980年、p.938。
 - 18 明治17年の「岐阜県旧大垣藩士族就業状況」では、官吏11.9%、教員4.1%等となっている（濱名篤「明治初期階層構造の研究—『士族』の場合—」（『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会、1995年、p.93）による。）。
 - 19 「明治22年度制定字杖ヶ洞溜池規定書」（美濃加茂市信友区有文書・美濃加茂市民ミュージアム寄託）などによる。
 - 20 下米田小学校の賞録簿によると、村の教育のために藤馬が寄付をしていることもわかる（尾関公見「津田先生のご両親」、前掲、1965年）。
 - 21 「自分の家では江戸時代の武士の家の教育みたいなものは別に教えられていなかった、と言っておられますが、事実そういう空気の中で育った先生の書いたものや論文を読みますと、不思議に思われるほど新しい近代的な調子、考え方が見えています。」（栗田直躬『中国思想における自然と人間』岩波書店、1996年、p.344）
 - 22 家永、前掲、1972年。
 - 23 津田の読書の仕方に関しては、原随園「津田博士の読書」『全集』第2巻、1963年、附録所収）にも記述がある。
 - 24 拙稿「「子どもの時のおもひで」からみる津田少年期の読書体験について」『津田左右吉と美濃加茂』津田

左右吉顕彰会、2011年。

- 25 津田が直接読んだと思われる『日本外史』が早稲田大学図書館収蔵資料中にある。「岐阜県美濃国加茂郡東栃井村士族・津田藤馬長男・天満神社氏子 津田左右吉・明治六癸酉十月三日生」とメモあり。前掲『図録』p.4 写真参照。
- 26 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」、前掲『図録』、p.36。
- 27 李建花「津田思想史学の方法論」『社会文化形成第3号』社会文化形成研究会、2011年 所収。
- 28 また、榊原芳野の編纂した歴史書『太古史略』についての津田は「皇室のことや、後にやかましくいはれるようになった國體といふやうなことについて、教へられたり注ぎ込まれたりしたことは、何も無かったにちがひない。」(p.41)と感想を述べており、興味深い。
- 29 鈴木瑞枝氏は『絵本小栗一代記』『水戸黄門仁徳録』の2冊を津田から譲り受けた。前者は、のち美濃加茂市民ミュージアムに寄贈された(鈴木瑞枝『黄昏の人』八雲書房、1994年、p.62)。『図録』p.4 写真参照。
- 30 「僕にとっては偶然のことながら、西本願寺の別院の発起で、一種の私立中学のやうなものが名古屋に建つことになり…」(「子どもの時のおもひで」以後)、p.103)。
- 31 尾張高等学校『155年のあゆみ』1982年頃。
- 32 「子どもの時のおもひで」以後)、p.104。
- 33 「経歴の上では比較的ふかい関係を結んでいたのに、主体的には仏教信仰と根本からして無縁なのであった。」(大室幹雄『アジアンタム頃』新曜社、1983、p.119)。
- 34 『密厳教法』166、1896年(今井修編『津田左右吉歴史論集』岩波書店、2006年、p37～p38)。
- 35 松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成」『尾張藩社会の総合研究・第三篇』清文堂出版、2007年。
- 36 『全集』21巻付録写真及び前掲『図録』p4 写真参照。
- 37 早川万年「津田左右吉の生い立ちと青年時代」、前掲『図録』、p.36、土田健次郎「語録解義 解説」、前掲『図録』、p.20。
- 38 大室幹雄は、津田の国家主義的儒教道徳に対する批判に関し論じている(大室、前掲、p.82)。

(かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム学芸専門監)